

書評：『口譯 理論與実践 語言與交際』

(通訳 理論と実践 言語とコミュニケーション)

著者：李 達六

外語教学與研究出版社（中国・北京）1994年8月発行

ISBN 7-5600-0741-4

永田 小絵

(獨協大学・中国語通訳者)

1. 著者紹介

自序によると、著者は中国語とドイツ語の会議通訳者で、北京外語学院で通訳訓練を担当している。著者は1959年に国家の通訳集中訓練コースに参加したのが正式に通訳訓練を受けた最初で、その後、50年以上も通訳の実践と教育に携わってきた。1990年に天津で開催された中独通訳シンポジウムをきっかけとして著したのが本著である。

2. 本書の概要

第1章を導入として通訳の定義に当て、翻訳との相違、歴史的変遷、通訳の原理について説明し、ここで通訳を知識に裏付けられた理解と言語表現による伝達の過程であると結論づける。

第2章では理解をとりあげ、話し言葉の特徴、スピーチの構成・目的と論旨展開、分析と記憶、自発的理解と自覚的理解の相違、通訳者の分析方法について述べる。

第3章で通訳者の知識について専門分野での知識と一般的で幅広い知識との比較、知識を獲得する方法、作業言語における言語知識レベル、ターミノロジーについて説明し、さらに原語と訳語の等価には3種類あるとし、基礎等価（世界的に共通する基本的概念を表す語彙）、定訳等価（すでに組織や団体によって訳語が定まっている語彙）、文脈等価（コンテキストによって生み出されたその場限りの伝達に用いる語彙）があるとする。

第4章では TL (Target Language) 伝達に関する論述を行っている。まず SL (Source

NAGATA Sae, "Book Review: *Interpretation: Theory and Practice -- Language and Communication*. (by Li Yiliu)"

Interpretation Studies, No. 1, December 2001, pages 144-146.

(c) 2001 by the Japan Association for Interpretation Studies

Language) に用いられた言語表現と伝達すべき内容の関係について述べ、さらに TL の受ける母語干渉、言語コミュニケーションの進展と個別言語の純粋性の問題、通訳者の存在が 2 言語のコミュニケーションに与える影響、スピーチ・パフォーマンスなどに関してが中心的なテーマである。

こうして第 1 章から第 4 章までで「通訳とは何か」という本質的な問題を概観し、読者に通訳という行為が複雑なメカニズムを持つ言語コミュニケーションの形態であり、さらに通訳者の個人的な資質の影響を大きく受けることを印象づける。

第 5 章では実際の通訳業務がどのように行われるかを説明している。ここでは最初に通訳者に求められる資質について述べ、続いて逐次通訳、同時通訳、原稿の扱い方、ノート・テイキング、実践における問題点（訳せないときの処理、誤訳の挽回方法、詩や格言の訳し方など）、通訳業務が通訳者に与える負担と疲労度について簡単に紹介する。

最終章である第 6 章は、通訳の教育訓練に関する内容である。教育の目的、学生に求められる資質と条件、教師の質などについて述べた後に、逐次および同時通訳の訓練法を具体的に紹介し、最後は欧州の大学院で行われている通訳訓練課程のコース・デザインを参考資料として掲載している。

3. 論評

タイトルを日本語に訳せば『通訳 理論と実践 言語とコミュニケーション』である。コンパクトにまとめられているが（126 頁、約 10 万字）、非常に広い範囲の内容を網羅しており、そのために全体的に記述があっさりしすぎているのが残念だ。

各章の標題を見ると、本来ならそれぞれの章がすべて一冊の本になりそうなテーマだが、全 6 章にそれぞれ 20 ページ程度を当てているのみである。

また、随所に Seleskovitch の影響が伺われることも特徴である。たとえば、通訳のプロセスにおける SL の情報把握は「受け取った言葉を即座に忘れ去り、センス（概念、思想）だけを記憶する」として記述される（第 1 章第 5 節 pp. 10-11）。

また第 4 章第 1 節では、言語と思想の関係について、言語と思想は完全に一致するものではなく、ある語の出現によってそれまで名付けられていなかった事物や思想の入れ物ができ、それがさらに新たな思想の出現を刺激する相互作用をもたらす、と述べる。つまり、基本的に意味・知識・経験は言語の形式によって脳に蓄えられているのではなく、言語はあくまでも表現手段として用いられる。事物が実際の音声や文字などによって表現されることによって思想が活性化し促進されるという考え方である。これを著者は「言葉と思想は代わる代わる出現する」と表現している（pp. 64-65）。

だが、一方では通訳の実践における語から語への対応も排除せず、第 3 章第 11 節では最も基本的な語彙は自動的に対応する訳語に置き換わること（p. 59）、同第 12 節の「専門用語」ではすでに定訳のある語では通訳者の自由裁量の余地がないこと（p. 60）

も明確に述べている。

上記のほか、評者が興味を持った記述としては、第2章第6節にある「自発的理解」と「自覚的理解」という概念である。一般的に、人が何らかの情報を得て、その内容を他者に伝えようとするとき、印象に残っている事柄（すなわち特に興味を抱いて見聞きした事柄）を中心として情報を再構成し、周辺の事実は圧縮されて要点のみとなる。これを「自発的理解」と呼ぶ。これに対して通訳者が行う「自覚的理解」は受け取った情報（言語の表層構造ではなく意味と構成と意義）のすべてを過不足なく、歪曲せずにそっくりそのまま伝達するための理解であって、これには聴取と同時に行為される迅速な分析が不可欠であるという (pp. 30-31)。さらに、受け取った内容をより深く理解し記憶にとどめる手段として、第2章第7節の「通訳者の分析方法」で、通訳者が自分なりの態度や見方を持って談話を聴取し、その内容に対して何らかの評価や判断を下すように勧めている。これが、本を読みながら傍注を付ける役割を果たし、通訳者の理解を促進するという（もちろん、訳出する際には通訳者の主観を交えてはならない）。

一般的な通訳入門書とは異なり、個別言語に焦点をしばった対訳教材ではなく、非常に広範囲の内容が理論的かつコンパクトにまとめられており、通訳の実践と教育に豊富な経験に裏打ちされた理論と具体的なアドバイスがぎっしりと詰まっている。通訳の実例も少なく研究書としては物足りないが、大学や大学院での通訳教育における入門書として適当であると考えられる。

評者紹介：永田小絵 (NAGATA Sae) 獨協大学外国語学部言語文化学科専任講師。日本通訳学会理事。中国語翻訳・通訳の学習サイト「日華翻譯雑誌」を開設している (<http://member.nifty.ne.jp/NAGATA>)。E-mail: <s-nagata@a2.shes.net>
